

## 密教伝授に掛かる大金の工面

ところで、密教とそれに関わる諸々のものを授かる為にかかる莫大なお金、これを空海はどうやって捻出したのだろうか。

もちろん、現在でも法を授かったり、仏具、仏画等を譲ってもらうとなったら、授かる方が授ける方に何らかの謝礼はする。しかし、必ずしもそういった場合だけではない。

この密教相承にかかる費用を、空海がどうやって工面したかと言う事について、私は、授ける方の恵果阿闍梨が必要なお金の援助をしたのではないかと考えている。

その理由は二つあるが、まず、恵果阿闍梨の元々の性格としても、自分が受けたものを自分の下にためておくのではなく、必要とする人があれば与えてしまう。物やお金に対する執着がない人柄であったということがある。『性霊集巻第二』によると

**恵果阿闍梨と言う人は、たとえ、金銭や絹を積んだ車が続いて、多くの信施として納められたり、田や果樹園の施入が、百畝を並べる程に沢山あっても、それらを受け取りはするのだが、溜め込むような事はしない。・・・貧しいものを濟う時には金銭を使い、迷っているものを導くときは教えを使う。財産を溜め込まない事を心掛け、教え導く事を厭わない性質なのだ。**

とある。今ひとつには密教の正統な付法者としての恵果阿闍梨の一面も見逃せない。

恵果阿闍梨には、自分が不空三蔵から授かった密教の法燈を次に伝えないといけないという強い使命感があったはずだが、「わたし恵果の命は尽きようとしているが、わたしが持つ教えを伝えるべき人がいない」という状況であったのが、空海が来てくれた御陰でその使命が果たせるという喜びもあったはずだ。その、空海を待ちわびた様子や、会えた時の喜びは『御請来目録』による

と

わたしは先般からあなた空海がわたしのもとを尋ねて来ることを知って、今か今かと待ちわびていました。今こうしてまみえることが出来たのはとても、とても喜ばしいことだ。わたしの寿命は尽きようとしているのに、わたしの持つ教えを授けるのに相応しい人がいなかったのだ。あなたは速やかに用意を整えて法燈継承のための灌頂という儀式を受けなければならない。

とある。

その三年前802（中国暦貞元十八）年、病で床に伏した恵果阿闍梨は7人の弟子に密教の法燈護持を託したと言う。これが已むに已まれぬものであったと言うのは、先の言葉が表しているが、それが空海と言う東国からの異能の出現によって、その法燈の全てを託すことが出来る人材がようやく現れてくれたと歓喜に包まれたのだ。これで自分の使命が果たせるのだから、そこに私財を投じることに何の躊躇も無かったはずだ。

傍から見れば、空海はとんだスネかじりだが、それはすべて密教を授かり、弘法の足場にする為だったと考えたら、そのお金は活きた使われ方をされたことになり、遣唐使の資金などを与えた親としても、密教相承にかかる費用を自ら負担した恵果阿闍梨としても本望であったろう。

空海も、お金を親や師僧に用立ててもらったからといって恥じる気持ちなど、微塵も無かったはずだ。

さらに、恵果阿闍梨同様にお金に拘泥しない空海の性格は、真言密教という教えを確立し、弘める上でも一役買っているように感じられる。